■全体解説

この作品を一言で言えば「聖書のストーリーに沿った歌う変奏曲」です。

以下、「聖書」「歌」「変奏」この 3 つの観点から記します。

1. 聖書

テーマ提示後の最初の変奏で旧約聖書のイザヤ書を引用した後は、新約聖書の 4 福音書からイエス・キリストの誕生から受難、復活までの足跡にかかわる記述を適宜選び、記された事柄に沿って綴る簡便な言葉を歌詞としています。歌詞そのものに主観的な思い入れを加えず、出来事を音楽に映し出すことを主としていますが、受難と復活については「私」「私たち」の視点が加わります。

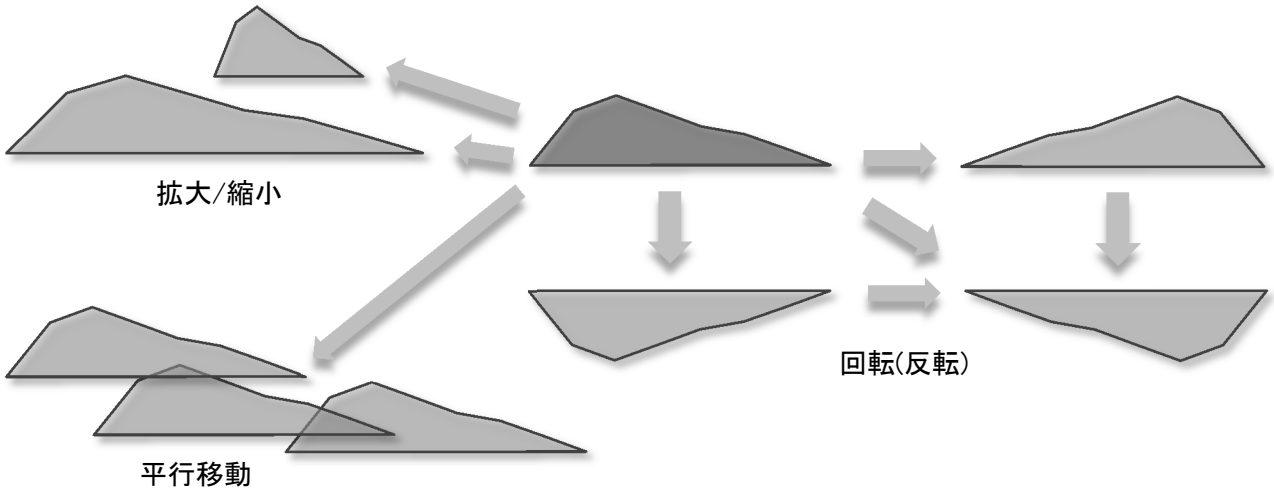
2. 歌詞

主に作曲者による日本語の歌詞ですが、ラテン語のみ、ラテン語との混在を試みた変奏もあります。日本語による歌詞については、”説明調” となる事による言葉と音楽の乖離を避けた結果、歌詞が時に舌足らずであったり文法的な曖昧さを残す場合があり、文体は必ずしも統一されていません。詩人や高名な歌詞作者による歌詞ではないので、より的確な歌詞の提案があれば検討の上、置き換えも可能です。また、日本語に限らず、様々な言語による訳詞あるいは聖書に沿った創作作詞によって歌われる可能性も視野に入れています。

3. 変奏

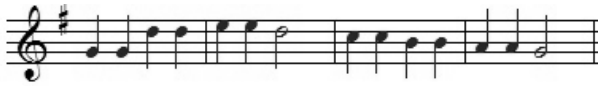
おそらく世界中で最もよく知られた子供の歌の一つである「キラキラ星」の旋律をテーマに、それを現代のコラールのように見立てて、多様な切り口からの変奏を試みています。通常よく行われる主題の装飾、展開、拍子/リズムの変化、転調等に加え、調性/モード(長調、短調、ドリア、ミクソリディア、フリギア)、和声/対位、様式(多種のカノン、フーガ、パッヘルベルコラール様式、朗誦調 等)でも変化をもたせています。大半は 4 声体(全ての声部が縦横両方向の整合性を持ち、 演奏効果目的の脈絡のない和音の付加等は自制)で、テーマは最上声部に限らず、バスを含むいずれかの声部あるいは複数声部にわたって現れます。

また多くの変奏ではテーマのトランスフォーメーションを試みています。“トランスフォーメーション” とは本来幾何学図形等の変形に用いられる用語の作曲者による勝手な転用ですが、テーマ(元旋律)に対する 3 つの操作((1) 拡大/縮小、(2)平行移動、(3)回転/反転)を表します。

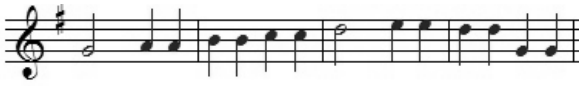


この内、(1)はフーガの展開部などでよく用いられる主題の「拡大」、(2)はカノンでの主題の「模倣」等に相当しますが、(3)はテーマに対する 3 つの操作、すなわち上下反転(高低の逆転)、前後反転(時間の逆転)、180°回転(高低の逆転 x 時間の逆転)に対応します。

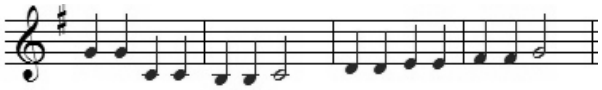
元のテーマ



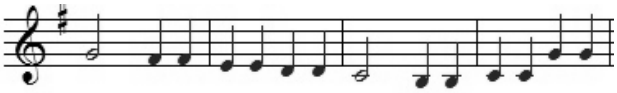
前後反転したテーマ



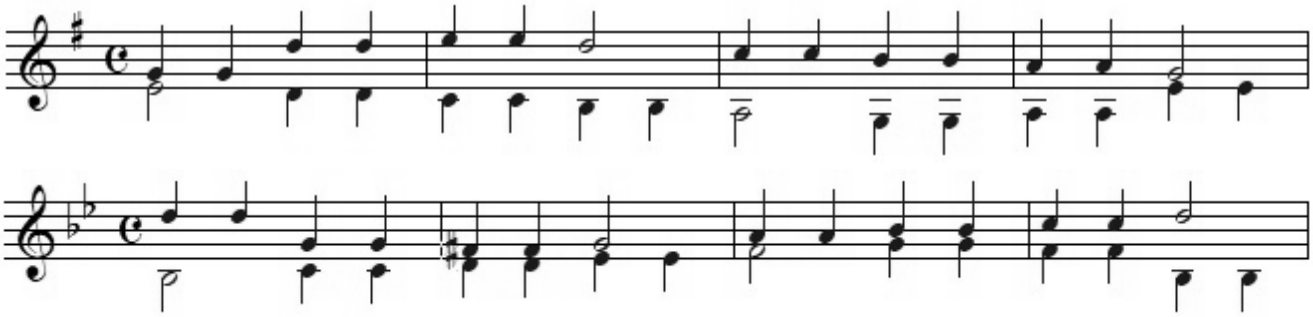
上下反転したテーマ



180 回転したテーマ



テーマがそのように変換されて現れたり、さらに別種の変換による複数の旋律線が一対となって現れる場合(たとえばフーガ主題に対する対旋律あるいは通奏低音が主題の 180°回転形となる等)もあります。



そのほか、いくつかのフィグーラ(半音階下降/上昇、十字架音型、喜びのリズム等)を適用したり、マクロとミクロの観点でのテーマ同士の組み合わせ、歌詞/音符が共に回文になる(反対側から演奏しても同じ)試み、非日常的な素数変拍子、曲中の音名に人名を埋め込む等、色々な試みが他にもありますが、個々の変奏の解説でご覧ください。